

【ポスター発表】

グループバリデーション実践による認知症高齢者への効果(2)

○ 神戸親和女子大学 米澤美保子 (7409)

家高 将明 (関西福祉科学大学・7811) 三田村 知子 (関西女子短期大学・8727)

都村 尚子 (関西福祉科学大学・3861)

キーワード: バリデーション、認知症高齢者、臨床認知症評価法(CDR)

1. 研究目的

厚生労働省の研究班によると、認知症高齢者数は予備軍も含めると800万人に達すると示された(朝田 2013)。認知症は年齢の上昇によって有病率などのリスクが高まると言われており、高齢化率が上昇を続ける日本では認知症高齢者の数が増えていくことが予想される。認知症高齢者が増加するこのような状況であるにも関わらず、認知症高齢者を支援する介護や看護の現場職員は、認知症の周辺症状に起因すると考えられる認知症高齢者の行動から、コミュニケーションが阻害されることに困難を抱え、大きなストレスを受けており、このことはひいては離職率の高さの誘因にもなり得る。

このようなことから、認知症高齢者とのコミュニケーションの阻害を軽減することは非常に大きな課題である。認知症高齢者と関わる現場には、認知症の程度が軽度から重度までの認知症高齢者が存在し、職員は異なる認知症の程度の高齢者を支援している。認知症高齢者とのコミュニケーションの阻害の軽減という課題を克服するためには、認知症高齢者とのコミュニケーション法である「バリデーション」の活用による認知症の程度別の効果が期待される。しかしながら、バリデーションの効果に関する実践的研究の蓄積は十分になされていないことから、エビデンスを蓄積していく必要がある。

そこで本研究では、特別養護老人ホームに入居する認知症高齢者に対する認知症の程度別のバリデーションの効果を、グループバリデーションの実践から明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、特別養護老人ホーム4施設において、入居している認知症高齢者を対象に、グループバリデーション実施群(以下GV群)と、実施していない群(以下C群)それぞれに対してPRS(Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale)による調査を実施した。調査を実施した地域、グループバリデーション(以下GV)実施時期、人数はそれぞれ、香川県2013年6月～9月 7名、富山県2013年6月～9月 9名、兵庫県2013年6月～10月25名の合計41名である。GVは、1グループ4～5名、1回30～45分を週1回、計10回実施した。GVの効果を測定するために、GV実施前(2013年6月)と、実施後(2013年9月ある

いは10月)にPRSによる調査を実施した。分析対象者は、回答に欠損値のあった調査対象者を除いた37名である。その内訳は、GV群が21名、C群が16名、臨床認知症評価法(CDR)得点別人数は、1点が9名、2点が11名、3点が17名であった。なお、CDR得点の障害度は、1点；軽度、2点；中等度、3点；重度である。

分析方法は、各人のPRSの評価項目「楽しみ」「怒り」「不安・恐れ」「抑うつ・悲哀」「関心」「満足」(「怒り」「不安・恐れ」「抑うつ・悲哀」については、評価得点を逆転)の得点(各1-5点)を合計し、GV群、C群それぞれCDR得点ごとにGV実施前後でWilcoxonの符号付き順位検定を行った。また、GV群の各CDR得点のGV前後のPRS得点の中央値の差を、Kruskal-Wallis分析を行った。有意水準は $p < 0.05$ とした。統計解析はIBM SPSS Statistics20を用いて行った。本研究はJSPS科研費25510020の助成を受けて実施した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の倫理規定に基づき、関西福祉科学大学倫理審査委員会の承認を受け(No.13-08)、研究を実施した。

4. 研究結果

GV群におけるCDR得点1点のGV実施前のPRS得点の中央値(範囲)は19.0(16.0-26.0)点、実施後が29.5(26.0-30.0)点で有意に増加($p < 0.05$)、CDR得点2点では、GV実施前が23.0(12.0-28.0)点、実施後が29.5(24.0-30.0)点で有意に増加($p < 0.05$)、CDR得点3点ではGV実施前が20.0(10.0-24.0)点、実施後が26.0(26.0-28.0)点で有意に増加($p < 0.05$)した。C群では全てのCDR得点で有意差が認められなかった。Kruskal-Wallisの検定結果は、有意差が認められなかった。

5. 考察

全てのCDR得点でGV群の検定結果の有意差が認められ、またGV実施前後の中央値が、実施前より実施後の方が有意に高いことから、全ての認知症の程度で高齢者へのバリデーションの正の効果が示された。また、GV群のCDR得点ごとの、GV前後のPRS得点の中央値の差の検定結果で、有意差が認められなかったことから、バリデーションが認知症の程度に関わらず効果のあることが示された。今回の分析では、バリデーションが、認知症高齢者のどのような感情表出に影響しているかについて、具体的に明らかにすることができなかった。今後の課題は、PRSの評価項目ごとにさらに分析を進め、バリデーションと認知症高齢者の感情表出の詳細な関係性について明らかにし、さらに、認知症の程度別の差についても明らかにすることである。

[文献] 朝田隆, 2013, 『都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応』厚生労働科学研究費補助金認知症対策総合研究事業 平成23-24年度総合研究報告書。